長井市

おけさ・勘三郎夫婦が　掘った「おけさ堀」

今も農業用水路として利用されている「おけさ堀」には、このような言い伝えが残っております。

長井の西北部に位置する草岡村（現長井市草岡）は西山の山すそに開けた村で、名前のとおり草の生えた岡で、水不足のため田んぼができなかったそうです。

その西山の裏側には、タンナケ沢と東セキノ沢という水のたくさん流れる沢があり、水不足になやむ草岡村の農民たちは、なんとか山を越して水を引けないものかと思いなやんでおりました。

そんなとき、勘三郎とおけさという夫婦があらわれ、この水を引いて村を助けたいと、上から勘三郎が下からおけさが手分けしながら二人で掘りはじめたのでした。

おけさは、小さな赤ちゃんを背負い一生懸命働き、仕事に夢中になりすぎて背中の赤ちゃんの首が落ちてしまったのにも気がつかなかったほどでした。

おけさ・勘三郎夫婦が掘ったといわれるおけさ堀

上と下とで掘り進み、出合ったところに落差ができてしまい滝となったので、村人たちは「おけさ滝」と名づけたというお話です。

おけさ堀は、いつだれが作ったのかははっきりしていませんが、このようなお話が残っていることから、昔の人たちが苦労して掘ったことは間違いないでしょう。

一度も使われなかった穴堰

そのような、おけさ堀は山の中にあるため、管理が非常にたいへんなものでした。村人みんなでの堰払い（水路の掃除）や、月2回3人1組での見まわりなど、草岡村の人たちは長い間大切に水路を守って来ました。昭和の始め、苦労する村人たちは、穴堰(トンネル)により山を掘り、いちばん短い距離で水路を引くように計画しました。

約2年間の工事により、219.3mの穴堰が完成しましたが、残念なことに作るとき高さを間違ってしまい、水を流すことが出来ませんでした。その後、なんとか水を流せるようになったのですが、上流にある菅野ダムの建設により、水を取ることが認めてもらえず、一滴の水も流すことなく、今も山の中にたたずんでおります。

このようにして、江戸時代から村人のくらしを守ってきた「おけさ堀」は、野川から直接水を取ることができるようになった今でも草岡の人たちには、大切な用水路として管理されております。

【参考文献　野川と土地改良　別冊…野川土地改良区】